

清末經濟官僚盛宣懷の明治日本体験

—「愚齋東遊日記」(1908)を読む—

王 紅梅

キーワード 盛宣懷 「愚齋東遊日記」 清末 近代化 訪日

1. はじめに

盛宣懷Sheng Xuanhuai (1844–1916) は中国の古典的、儒学的素養で培った価値観を根底に、政府での官位昇進を果たしながら、「洋務」企業の営みによって自己の王国を確立し、そして崩壊も余儀なくされたという中国封建から近代への過渡期に生きた草分けの実業家の一典型であった。

盛宣懷は、かつて中国大陸において「人民史観」的原則に基づいた研究では「官僚買弁資本家」の代表とされ¹、その研究さえタブー視されていた。しかし今日では、中国経済の発展を背景に、とりわけ近年の資料発掘や整理が進んだことによって、盛の近代中国工業化における役割が再検討され、彼の研究価値が認められつつある。²ところで、その日本との接点を記録した「愚齋東遊日記」は、まだいくつかの関連研究で触れられる程度に留まり、専門に扱う研究は見当たらない。³

本稿は、封建社会から近代への過渡期における草分け的企業家、岩崎弥太郎と盛宣懷の比較研究の一環として、唯一「三菱」と直接接点を持った「日記」を取り上げて研究するものである。⁴訪日時名実共に中国清政府トップクラスの経済官僚としての盛は、当時の日本をどのように観察したか、そこから読み取れる盛宣懷の日本認識、中国の問題に対する認識、ひいてはこの訪日経験が彼にとってどのような意義を持っていたか、1908年当時の日中両国の情勢と照らし合わせながら、究明したいと思う。

2. 盛宣懷と「三菱」との接点

明治七(1874)年の「台湾征討」に際し、日本新政府が敢行した初めての海外出兵に、運送役を敢えて請け負ったのが民間会社の経営者岩崎弥太郎であっ

た。一方、相方の中国では、台湾時勢への関心及びその対処法への献策等を当時福建省船政担当に三回も送り、遂に軍隊及び軍用物資の運輸に尽力したのは、他でもなく、当時「准軍後路糧台」の地位にあった盛宣懷であった。結局、『北京専条』及び付録『會議凭單』という、中国にとって初めての日中不平等条約が締結されることで終戦した「台湾征討」は、岩崎弥太郎を「政商」へと上りつめさせ、大いなる繁栄をもたらした。その一方で、中国では、近代民用商工業を興し、外国の圧力に抵抗する為海軍の実力を高めようとする、李鴻章『籌議海防折』が上奏されたことをはじめとした「求強求富」ブームが起こった。そしてそれが、洋務事業を志している李鴻章幕僚としての青年期の盛宣懷に、間接的に多大なチャンスを与えることになった。

その34年後の1908年、かつて敵であったはずの両者は対面することになった。⁵『三菱』の方では当主が弥太郎の長男久弥に変わり、対面の場は久弥の別荘での夕食会であったが、この時の盛の記述は主に庭園、池、夕日等の叙景に留まった。訪日を終えて帰りの船が長崎を一時通過した時、「岩崎〔久弥〕男爵が船中まで来訪、三菱合資会社造船所の視察に誘われた」（「日記」P155、以下「日記」からの引用に関してはページ数のみを記すこととする）と記している。盛は久弥の誘いに「どうしても言われ断り切れず、一緒に小蒸気船に乗って造船所に行った。」(155) 岩崎や丸田所長及び荘田平五郎技師に各工場を案内され、盛は極微細なところまでその見聞を記し、さらに技術の先進性や福祉施設の完備に感服している。

中国と同じウエスタン・インパクトの下で、不平等条約を押し付けられた日本では、1899年まで治外法権が存在しており、1910年までは関税自主権が完全に確立されるに至ってはいなかった。その当時、「軍事的侵略の形でも、また明治初年の開港都市に極めて深い根をおろした外国資本というはるかに不吉な形でも」、「気味悪い影」⁶が覆っていたことは清末の中国も同じであった。しかしかつての「台湾征討」に際し両国とも尽力したにもかかわらず、結果として不平等条約の締結で終戦したのに加え、日清戦争に至って清政府は海軍の全滅を味わい、「洋務運動」の全敗を経験した。もう一方の岩崎が政府の庇護を受け、全盛期を迎えるのに対し、盛の方はその経験を学ぶ為の小僧に身を転じる。19世紀の半ばから同じ様に西洋からの脅威に対抗し独立国としての存廃競争に直面しなければならなかった中国と日本が、半世紀にわたる必死の苦闘を経てやがて正反対の運命に辿り着いたことは、また、盛と岩崎に関わる実業の対照的な運命にそのまま反映されたのであった。

3. 1908年の訪日について

1908年の訪日は、盛宣懷の生涯三度に亘る来日中の二回目である。それも、1871年27歳の頃初めての訪日時「日本の友人は一人もいない」という状況を完全に引っ繰り返したものである。⁷1908年は盛宣懷が「漢冶萍煤鉄廠鈹有限公司」（略称漢冶萍公司、鉄鋼・石炭のコンビナート会社）の社長であると共に、交通通信を管轄する清政府郵伝部右侍郎に登り詰め⁸、鉄道、電報、郵船、郵政大権を一手に握る事になった年である。当時の中国は日清戦争（1894-1895）を経て日露戦争（1904-1905）後、辛亥革命（1911）の直前に当たり、清朝政権が内憂外患に苦しめられ、崩壊寸前の状態にあった。一方、同じ東アジアに位置する日本は、時恰も国威鷹揚で、西欧列強と比肩すべく、近代国家の建設に邁進している時期に当たっていた。時局の推移につれ日本社会の対中感情は、師従より嫌悪に変わった事を自ら体験した同時代の多くの中国人⁹とは対照的に、病気治療を口実にした盛の日本滞在は、明治政府の政界、財界の要人¹⁰から悉く繊細周到な世話を焼かれた三ヶ月となった。

長年悩まされていた肺病を治療できる名医北里柴三郎の存在を知っていたのは無論の事、「漢冶萍公司」の借款交渉の緊迫感や、清末中国において前人未踏の諸領域を次から次へと開発していく中で見えてきた自分自身と国の限界や、そして隣国の開国以来の模索や業績を見聞しつつ、それを一望してみたいという願望が、今回訪日の原動力となった訳であろう。

4. 克明な記述のバックボーン—「読書人」としての伝統的文化素養

『日記』で盛は沿路経過した場所も逐一その地名から地形、特産や見聞等を詳しく綴っており、日本の財政制度、通貨制度、銀行、書道、絵画、建築、庭園、古書、教育、養生、衛生、炭鈹、製鉄、造船等々、きわめて多岐に渡る関心の広さが明瞭に現れている。

そしてその克明な記述の背後に必ず中国の古典があることが伺える。例えば、養生の道に触れた時、『大学』（42）を引用し、下関を通る時目にした風景の様子は、「桃源郷の世界を見るようだ」（48）という。¹¹九月十日¹²日本で「仲秋の名月」（51）を見て、韓愈¹³による「一年明月今宵多」（51）を口ずさみ、盆栽の会社で葉げいとうを目にしては、「誰将葉作花顔色、更為（与）春風迥不同」（誰が葉を花のような色にしたのであろう。赤い花に緑の葉という春らしい

姿からかけ離れてしまった)¹⁴ (62) と詠む。鎌倉の風景を見ては「落霞孤鶩齊飛、秋水長天一色」(落霞、孤鶩と齊しく飛び、秋水は長天と一色)¹⁵ (65) と吟じた。このように、盛が景色を賛嘆して叙情する為にしばしば用いるのは古典であると同時に、贈答時に一番多く見られるのは「対聯」であり、長年にわたって身に染み付いた封建教育の素性もさらけ出している。¹⁶これらによって彼はただの成金趣味の実業家ではなく、伝統的な古典文化が身についた「読書人」であったことを思い起こさせる。

実際に盛の祖父も父も科挙試験に受かって封建官僚となったのである。そのような伝統的な「読書人」の家柄の関係で、盛は6歳で塾に入学し、12歳から八股時文を練習しはじめ、十数年間孔孟経書を研読した。彼も小さい頃から科挙に受かって官位を頂戴することを夢見ていた。盛は1866年に最低ランクの「秀才」に合格した後、1870年26歳で父の縁故で李鴻章の幕に入り、1873年中国海運業の嚆矢となる「輪船招商局」の開創から頭角を現し始め、その近代的な実業創立における草分けの才能が次から次へと開花し、やがて官界での昇進と相俟って、中国の「政商」として辣腕をふるった。しかし、盛は洋務実業事業に従事する前も、その後も次のランクの「挙人」に挑んだが、何れも落第している。1873年に彼は福建船政を視察した時から新式学校を設立し、新式人材を育成しようと主張し始めたが、その後も科挙試験に熱中していたことは実に興味深い。科挙の「省試」を一回もパスできなかったことは「読書人」を気取る盛にとって生涯の悔いとなった。

5. 盛宣懐の日本観察

5-1 盛の日本認識

前述したように、わずか三ヶ月の盛の日本滞在は、明治41年当時の朝野各界60人を下らない豪華な顔ぶれから悉く歓待を受けた。その際、日清戦争、日露戦争終戦後の日本人に面し、盛には亡国の民たる卑屈さもなく、無闇に天朝上国を誇る典型的な封建官僚の尊大ぶった様子もなかった。

それは盛の日本認識にも関連することであったといえる。盛にとって、日中両国は「同文同種」であること、そして同じ東アジアに位置する兄弟のような隣国であることが、その認識の根底を為していた。

盛は日本新任駐北京公使伊集院彦吉との会談で「中日は同文同種で兄弟のような隣国である」(下線は筆者による、下同)(69)と語り、続いて八幡製鉄所長官中村男爵に以下のような「古風」を一首書いて贈呈した。

「天生瑰質強黃種、(天性の優れた能力で黄色人種を強くし、)
 地不愛宝資重東。(豊富な鉱産を惜しまずに東アジアを潤す。)
 屹然兩廠双峰時、(両製鉄所が屹然とあい並び、)
 歛若平生美意同。(互いの平素の志が同じであることを喜ぶ。)」(93)

また、十月二日付けの歓迎会に際しても、即興詩「同軌同文来万里、能画能書萃一堂」(同文同種のため遙々遠くから訪れ、書も画も名手の人が一堂に会する)(73)と詠んだ。

十月二十日(九月二十六日)伊藤博文との会談において、伊藤は二十年も付き合った盛の来訪に大変うれしく思っていると告げた後、「現在、貴国は全力で維新に努めておられる、これはアジア全体にとって誠に喜ばしいことです。」

(108)と言っている。伊藤はまた「庚子(一九〇〇年)の義和団事件」(110)や「それに続く戦争」(110)という敏感な戦争に関する話題についても触れたが、「現在は日中両国には友好の機運がきわめて高まっています」(110)と強調している。伊藤が話しているところに部下に入れられ、次の用事へ出発するよう告げられたので、この日に盛はコメントを申し上げる暇がなかったようであったが、すぐ翌日に外務大臣小村寿太郎に「東アジアと言えはまず中日両国が挙げられますが、両国は密接に交際するべきと考えます。」(111)と話され、盛は昨日伊藤の話に対するコメントと併せ、「鷸蚌[シギとはまぐり]が争っていたら漁師が両方とも捕らえてしまった」(113)という古い諺を借用しながら、「昨日伊藤公にお会いした際、『顧全大局、不爭小事(大局を保全し、小事を争わない)』という八文字を話されました。まさに貴大臣の仰ることと同じです。しかし、この八文字は互いが守らなければならないものです。」(113)と言り返した。

さらに十月二十四日(九月三十日)、内閣総理大臣桂太郎を訪ねた際、桂は同じく「近来、日中両国において親睦の雰囲気がとても高まっています。……表向きは我ら両国は他の国々の間ほど親密でないように見られがちです。実際はそうではありません。」(119)と日中友好を高く掲げている。

マルクス主義の人民史観に立つ夏は盛が日本において、中村や伊集院らとの接触に際し、「親睦」や「友好」が唱えられているが、それはあくまでも日本が殖民主義的な立場から、中国での既得利益を欧米に奪われないよう、盛を動かし、盛を利用してさらに侵略の触角を伸ばしたい目的によるものであったとしている。¹⁷

確かに以上の会話から、日本で会った面々がこぞって日中友好を強調しつつ、両国はアジアにおける隣国、アジアは日中からなるアジアという主張で、盛を巻き込もうとする意図が伺えなくもない。盛もその話に惹かれ、全く違和感を覚えなかったようであった。それは日本の八幡製鉄所と盛経営の漢陽製鉄

所の躍進が世界で注目され、「黄禍」と欧米に称されるようになっていたので、両所は欧米の挑戦に負けないよう互いに欠点を補うべく、合弁すべきであるとの実質的な利益の追求が「友好」強調のバックグラウンドにあったからであろう。しかし、盛を殖民／被殖民という視点に限って論述すれば、大事なメッセージを見落としてしまう可能性があるのではなからうか。

訪日の主要目的であった病気診療に際し、北里柴三郎の養生に関する説明を受けた盛は、養生の道は日中同様であると結論付けている。また大隈重信との対談では政治経済とはまったく関係なく、主に「養生長寿の秘訣」(103)について話を進めており、大隈は『素問』(『黄帝素問』、中国最古の医書)(『精神がしっかりしていれば、病気にかかるはずはない』)(104)や古詩(『時人不識余心楽、将為〔謂〕偷閑学少年』)[時人は余心の楽しみを識らずや、謂わんとす、閑を偷みて少年を学ばんと](104)や『論語』郷党篇(「適度でやめる」、原文は「適可而止(書ミス)」)(105)を引用しながら、大いに盛の同感ひいては親近感を引いている。また、盛は日本における在野の有名な儒学者岡千仞(振衣)と二十五年前上海の盛宅で筆談したこともあったが²¹⁸、今回の訪日に際し、岡がわざわざ盛を訪れ、その訪中紀遊の『観光紀遊』全三巻を贈呈し、盛は「重編日記両三巻、猶憶風姿廿五年」(再び貴方の旅行記三冊を拝見し、二十五年前の姿が目の前に浮かんだ)(67-68)という対聯を書して贈っている。盛はまた日本人書画界名士が集まった歓迎会は「海外での筆墨の縁」(72)を持たせてくれる風雅の集会であると賞賛し、「中国の乾隆・嘉慶時代にはこういった風流な催しが盛だったが、今は海外の風流は中国本土を超えてしまった」(73)と驚嘆している。

以上から察知できるように、盛にとっての「同文同種」はただ単に経済的利益のみによる表向き of 合言葉ではなく、長年に亘る日中友好交流の歴史を基礎に据えた漢学的、儒学的な価値観の共通性を体現する言葉であった。盛の儒教的伝統的教養から培われた精神的バックボーンが日本人との交流に生かされたのであった。従ってそのような日本認識を持った盛であればこそ、敗戦国民としての劣等感を持つ必要は全くなく、寧ろ平等な立場に立つことに成功したのだと言って良い。盛は日本を先進国として見做しているが、「同文同種」や「兄弟」という両国の間で抽出できる最大公約数たる言葉を用いつつ、日本を同じ先進国である西洋とは、また別に見分けているのであった。

5-2 盛による日本観察

盛にとって、訪日は、近代日本の立役者から財政制度や実業経営等について生話を聞いた大変有意義な旅でもあり、日本の近代経済、財政、法制度を見

習う恰好の学習場に成り得たのであった。実際に彼は造幣局や、製鉄所、造船所、紡績工場等の実地調査にも足を運び、その各々の訪問先はそのまま維新後上下こぞって一斉に近代化を進めた日本国民のエネルギーを実感させる絶好の機会を提供した。

残念なことに、精神的な側面における盛の日本観察は「この国の民の愛国心の強さには、他の国は到底及ばないと感じた」(67)ことや、「日本人は最も花や草木を好む民族で、かつ育てるのが上手だと思う」(98)や、「迷信の深さは中国以上である。外国人はいつも中国人が仏前に線香や花を供えるのを迷信だとあざけるが、日本人も目覚めていないのであろうか」(150)といった皮相的なものに留まっている。

精神的側面に関する表層的な目配りと対照的なのは、明治維新後四十年を経て、近代化された日本に関する膨大かつ克明な観察記録である。

九月二日(八月七日)に中国を出発し、十一月二十五日(十一月二日)自宅に戻るまで、日記中に挙がっている訪問先を逐一辿ってみると、その訪日の関心事が顕著に浮かび上がってくる。病気治療、工場参観、合弁会社の交渉、借款、私立図書館創設の為の書籍探求等については、これまでの研究でも触れられているが、ここでは、上に挙げた諸事以外の些細な箇所にも注意を払った実業家たる素質が見えてくる点について、特筆したいと思う。

盛は九月十五日(八月二十日)、馬車に乗って宮城外苑、衆議院、商品陳列所、郵便局、日本銀行、三井会社、各国の大・公使館等の地区を一回り見物してきた。そこで盛が気になったことは、

「路面電車は頻繁に往来しているが、交差点では必ず鉄道信号のように赤と青の旗を持った人がいて交通整理をしていた。日本で電車事故が少ないのはおよそこのおかげであって、路が広いとか機械が精密であるというのは二の次であろう。」(56)

盛は日本の整然とした路面交通に興味深く感じたのであった。

また、十月十七日(九月二十三日)、「帝国博品館(銀座にあった勤工場。多くの商店が出店して商品を販売した)を見学した。」(105)盛が目じたのは、

「すべての品物には価格がはっきりと表示され、かつ農商務省の「もし異なる値段で販売した場合、定価の二倍の罰金を申し受ける」という告諭が書かれている。……館内の場所が狭いため値引交渉などでもめると必ず混雑を招き、商売に支障をきたすということである。……この博品館は規模がもっとも大きく、管理がきちんとしてされている。中国でも工業と商業が日増しに発展していくので、ここにならうべきだと思う。」(105-106)

並びに、十月三十日(十月六日)鐘ヶ淵紡績会社を見学した。盛の記述は

「会社の定款・規則はほぼ中国の会社と同じであるが、ただ、清潔な作業場、徹底した管理、整然とした生産工程は中国の会社の到底及ばないところである。さらに工場長が有能ですべてに通暁しており、たまたまその任に当たっているというような人物の比ではなかった。敷地内には庭園があり、社員達が息抜きをするのに資する。また食べ物も販売している。なかなかよいやり方である。」(126)

整理されている路面交通、値段交渉をせず定価による商品売買、きちんとした管理、清潔な作業場、整然とした生産工程等、盛はそのような微細な所にまでも注意を怠らなかつた。明治の経済財政制度に関して盛は一番多く墨を費やした。日本のマクロ的な経済財政制度を大いに研究し、帰国してすぐ中央銀行を設立して幣制の統一に努める為の上申書¹⁹を上呈したことは、これまでの研究で触れられているが、しかし、ミクロな部分についてまで、盛が繊細な観察眼を走らせたことはあまり指摘されていない。きちんとした法律制度、会社管理制度、ないし会社敷地にある社員達が息抜きをするのに資する庭園の設置や食べ物も販売されるような「なかなかよいやり方」まで俯瞰すると、盛は清末中国に封建政権が君臨しているのと正反対に、会社の経営管理の面では、事実上の「無政府状態」を認識し、「中国の会社の到底及ばないところである」と痛感した。

そこで彼は実に図々しいと言えるほど、図書館の規則書、書目、年報から、銀行の条例、定款、沿革大要、職制及び事務分掌、創立趣旨の説明、営業報告等、会計法議案や合併会社の契約書までも倣おうと考え、悉く請求した。

実に訪日中盛は重工業のみならず、軽工業の紡績、醸造及び標本製造業、陶磁業、呉服店等にも足を運び、観光事業に対しても先駆的な関心を示した。ついでに、新聞の発売部数から推測できる日本教育の普及が「誠に我が国（中国、筆者注）の及ばないところである」(137)についても触れている。従って、盛は国家富強に資するよう各種の関連事業に至るまで綿密周到な注意を払ったのである。

総じていうと、盛の功罪を評価する際、近代企業制度の建設に関し、積極的に外国の先進制度を取り入れた姿勢やその実際に行った行動について評価すべきなのである。客観的にも、それは中国近代企業精神の形成や、近代企業制度の成立ひいては近代的生産力の向上に貢献した。

しかし、大阪で盛は造幣局参観のついでに養老院や孤児院も参観したが、「狭くて特に見るべきところはなかった」(142)と記すに留まっており、それらが盛の関心の二の次であったことを物語っている。

5-3 政治、経済の乖離

彭（2000）は夏の盛宣懐研究は政治、経済二分論に囚われていると批判している。なぜなら、夏は盛宣懐が経済活動においては歴史的発展の趨勢に順応したが、政治的には時代の流れに反動した²⁰と評価しているからである。

しかし、盛は主動的に時代の流れと正反対な政治的態度を取ったというより、「日記」からは、彼が経済関係に多大な関心を寄せているのとは大変対照的に、政治に対する無関心さ、或いは潜在意識では敬遠していたこと、ひいては政治への無頓着、不勉強すら読み取ることができる。

訪日前、日本政府からの電報に対し、盛は「専ら治療を受けるためであって、公務はないと答えた。」（40）取りも直さず、その訪日は政府によって派遣された公務ではなく、あくまでも病氣治療を目的とする私事であったことを強調している。同様に、船が長崎に到着してまもなく、船内に駆けつけた新聞記者の取材に対し、「今度のもっぱら治療を受けるため来日したもので、公務はない」（46）と答え、そして「朝廷の情勢について質問された場合はかねて決めておいたとおりに『私は高齢で物忘れがひどいので』と答えた」（46）だけであった。そして、十月二十日（九月二十六日）伊藤博文を訪ねた時、清政府の憲法制定は九年で成し遂げる予定であると聞き及んだ伊藤は、日本憲法の制定は明治六（1873）年に立憲君主制を確立すると決めてから、明治二十二（1889）年に至って初めて全国に憲法を發布できるに至るまで、伊藤自身が責任を担いつつ、乗り越えた苦難のプロセスであったことを語った。日本における憲法制定の困難さを考えると伊藤は「我が国より十何倍も土地が広く、人口も多い貴国において、九年で本当に達成が可能でしょうか」（109）と盛に率直な疑問を投げかけた。それに対して盛は「勅命により九年と定めた以上、それに従って急いで準備するしかありません」（109）としか答えられなかった。

続いて伊藤は立憲準備の当初から自分が立憲を主張した為、政府から将来中心となって制定事業をするよう期待され、海外視察に行かされたのであり、「今貴国で国外視察に派遣している憲政大臣は何人いて、将来誰が中心となって制定事業を担うのでしょうか。……閣下ご自身は、この任に当たることはおできになりますか。」（109-110）と盛に尋ねている。しかし、盛は「私はもう歳なので、その大任に当たるような者ではありません」（110）と答えるに留まった。

盛は常に年齢を口実に、「政治」的話題を回避しようとした。しかし、「日記」はまた我々に興味深いことを示している。李鴻章や清国皇帝、西太后に対する思いである。九月五日に目的港横浜に向かう船が、下関を通る時、はるか遠くにある建物「春帆楼」の存在を顧問に教えられ、それが日清戦争の際、李鴻章が講和条約の交渉の為特使として滞在したところであると知らされた。盛は下

船できないことを大変残念に思ったが、やがて十一月一日（十月八日）、製鉄所参観が実現した日の夜、「春帆楼」で歓迎宴会が開かれ、李鴻章を追懐する宿願も果たすことができたのであった。一般的に、日清戦争での中国側の完敗は李鴻章主唱の「洋務運動」の惨敗であると認識され、下関にて締結された不平等条約は、李鴻章の政治生命の終結及び「売国奴」とのレッテル張りを決定づけることになった。しかし、盛は終始李のことを「恩師」と尊敬し、和議交渉での苦勞を偲んで、涙をこぼすほどであった。

そして十一月十五日（十月二十二日）、「各新聞社が清国皇帝〔光緒帝〕陛下ご崩御の号外をあまねく配る」（152）と記し、次いで翌日の記述には、「新聞社からまた号外が出され、清国皇太后陛下崩御と伝えられた」（152）とあった。訪日中の盛が清国皇帝、皇太后崩御を聞いた後の反応は実に興味深い。

「地に伏して号泣し、体中が千々にちぎれる思いだった。……なぜ天は英明なる皇帝陛下、英明なる太皇太后陛下を永遠に橋山に葬られたのであろう。海外に滞在中の私は、黄帝の臣下がしたように、龍に乗って昇天する黄帝を慕って龍の鬚に取り纏ることもできない。

両陛下の玉音はなお耳に残り、また時局の厳しさを案じて、地を叩き天に叫んで泣き、血涙を絞った。」（153）

十一月十八日（十月二十五日）、中華会館で哀悼の礼を行った帰路、盛は明治天皇が海軍観艦式統監の為神戸へ行幸される途上に遭遇した。それは偶然ながら、あまりにも象徴的なシーンであった。盛は封建的統治者の死を遙々異国の地で哀悼していた日に行われた明治天皇の神戸行幸は、明治政府の「殖産興業」、「富国強兵」が大成功したことを表している。それに関して盛が一つも感想やコメントを綴っていないことは、「立憲君主制」に対しての認識が根本的に欠如していたことを意味していると理解してもよからう。

6. 中国問題への認識

盛の見聞による日本観察は、常に中国問題に連なっている。例えば

1) 貨幣制度に関して日本の優勢を認めた後、中国の貨幣制度は

「中国の銀貨・銅貨は各省でそれぞれ違い、本省を離れると価値が増えたり減ったりするので弊害がはなはだしく、銀貨や銅貨を使わない人さえいる。外国人は、中国二十二省はまるで二十二の国のようだが、貨幣の統一は最大の急務だと思う。」（55）

2) 古河鋳業の成功に対し、中国については

「以前より我が国では、金属鉱物の埋蔵量が豊富だと言われていたが、惜しいことにあまり重視されていない。実際に採掘されているのは十分の五にも届かない。確かな見込みと見識がなければこのような大きな危険を冒すことはできない。しかも中国の実業家は・鉱山は生殺与奪の権が官憲に握られているので、進もうとしても退いてしまう。だから鉱山で起業し成功した人の話を聞いたことがない。」(60-61)

- 3) 日本銀行を参観した際、日本銀行に「比べると中国の銀行は土の墓のようなものである」(91)と言っている。
- 4) 帝国博品館を見学し、「中国でも工業と商業が日増しに発展していくので、ここにならうべきだと思う。」(106)
- 5) 後藤新平が鉄道関係で行った改革を聞き、今の中国はまだ線路もすくなく、体制が整っていないが、将来鉄道網が発達したら、「この制度に倣うことが必要かもしれない」(116)と述べている。
- 6) 日本醤油醸造株式会社を参観し、醤油の作り方を「大豆はほとんど中国の奉天や鉄嶺などから調達、塩はドイツから仕入れ、小麦のみ日本の国産品を使っている」(144)ことを知っては、「中国では大豆、小麦、塩の三品目は国外から輸入する必要はない、もし機械を購入しここに倣って会社を創れば、原料が豊富な上、人件費も安いので、間違いなく利益は大きいだろうと思った」(145)
- 7) 京都に行って錦光山宋兵衛氏の磁器窯を見ては、技法はすべて中国の景德鎮に学んだものの、西洋磁器の技法を含んだ技術の改良に努めていることを聞き、「思うに、我が国の景德鎮磁器は、その繊細な純白が世界に冠たると言われ、昔から国内外に名を馳せていた。しかし、職人も絵師も古い様式に固執し新しい考えを拒むあまり、中国市場に外国磁器を氾濫させることになってしまった。磁器に限ったことではないが、人間には古いものを嫌い新しいものを好む性質があるからだ。現在、湖南省醴陵の磁器が改良されだいたい進歩してきている。すぐに立ち上がって追いかければ、追いつき追い越すことができるであろう。」(145-146)と言っている。

整然と整備され、各方面で近代化され、中国の師ともなる日本を眼前にし、清末中国の混乱を憂えた盛は、中国を富ませ、中国の実業を先進させたいと切実に願っていたのである。²¹

それでは中国はどうすればいいのだろうか。八幡製鉄所を参観した後、盛は肺腑を衝く感想を漏らしている。

「私は日本で各種事業を見てきたが、どの実業もすべて自国の人を使っていた。それは俸給を安くできるだけでなく、仕事に誠実だからである。中国

の大学、専門学校の設立は誠にもう一刻の猶予もならない、とつくづく感じた。」(128)

日中間に横たわる産業技術の差を埋めるには、「専門学校」の開設こそ焦眉の急であると考えたのであった。

実際に、1895年10月、まだ直接皇帝に上奏する資格を手に入れていなかった盛宣懷は、直隶(首都所在地)総督王文韶を通して新式学堂を設立するよう清光緒皇帝に上申した。光緒帝は自ら承認して押印したので「天津北洋西学学堂」が成立するに至り、盛宣懷は初代「督弁」(政府を代表する監督役)に任命された。翌1896年正式に「北洋大学堂」と改名された同学堂は中国で始めて「大学堂」と命名された学校で、言わば中国において初めて創立された大学であり、今日の「天津大学」の前身である。しかし後に天津大学の学生達が洋学に長じている反面、中国伝統学問に愚かであることを認識し、上海では中国の伝統的教養をしっかりと身につけた学生に新しい学問を教育する体制を作りたいという思いで、上海交通大学の前身「南洋公学」を設立し、「督弁」を勤めることになった。²²

7. 訪日の果てに

帰国後直ちに現れた成果として、横浜正金銀行との借款交渉が短期間に妥結したこと、1909年3月に日本をモデルにした財政改革案を上奏したこと、日本から上海へ戻った翌年、自宅の東側に日本の帝国図書館に倣って愚斎図書館を建造し始め、1910年に落成したこと等が挙げられる。

同時に、訪日中盛は法律制度の整備や国家保護がもたらす福音を目にしつつ、帰国して中央銀行の設立や鉄道の国有化を中国にも実現しようとして動きだした。しかし、盛宣懷はやがて鉄道国有問題で辛亥革命の導火線に火を付けて清朝滅亡並びに自らの失脚、結局、政治的生命の事実上の終結を導いて日本亡命を余儀なくされたのであった。というのも、鉄道を国有化したのち外国へ敷設権を売り渡して借款を得ようとしていると看做されたからである。従来の盛宣懷全面否定論でもそのことに因み、盛を「中国を半封建、半植民地にさせた元凶」や「外国資本に完全に頼った買弁資本家」としている。しかし、盛は同時に中国沿海航路における外国会社との競争の主唱者でもあり、統率下の「輪船招商局」を率いて「旗昌輪船公司」(米)(*Shanghai Steam Navigation Co.*)と顧客争奪戦を起こし、結局1877年に米会社が惨敗し、「輪船招商局」がそれを買収するという結果を導いたことも忘れてはなるまい。実業に従事し、さらに

外国人とのやり取りで腕を磨いてきた盛は、同時に外国と公平な立場に立って交渉する為、国単位での対抗の必要性を痛感していたはずである。その為もあって、日本を訪問した際には、「国家保護の法」について詳細に尋ねて記録した。鉄道を国有化する動きは日本訪問から得た教えを中国で実践しようとした盛の実際行動であると考えられる。

盛は清末中国が抱えていた問題についてもある程度は認識していた。鉄道の国有化は日本訪問に触発されて考案した中国救済策の一つに過ぎないだろう。明治維新後日本政府は西欧に倣い「国家保護の法」を施し、大いに成果をあげたことを自分の目で確認した盛は、積極的に中国にも取り入れようと取り組んだが、結果は中国救済どころか、自己の政治生命の終焉と日本への亡命をも余儀なくされたのであった。そのような悲劇的結果を招いたのは、盛の政治情勢への認識や展望のなさによるものであるといえよう。

8. 終わりに

1908年の訪日に際し、盛は異国体験によって即物的なショックを受けた。そしてそのショックに触発され、当地の事物に対する好奇心及び本国への愛郷心、さらに本国を改善しようとする使命感が沸きあがったことは、日記において克明に記録されている。

中国大陸におけるこれまでの盛研究は、政治的に偏った歴史学の方法論や価値観、或いは歴史的結果から歴史人物を検討するという視点によるものが多かった。日記の冒頭にて述べられているように、盛の病気は水害の救済物質を配布する際に感染したことに始まり、鉄道、鉱山、輪船招商局、電報局、銀行、学堂等各方面の職を兼任しつつ、さらに通商条約交渉委員も兼任し、中外各方面の斡旋に明け暮れている中食事も睡眠も満足にとれない為、どんどん悪化していったものである。それは彼の功罪を判断する前に、何よりもまず彼が一人の人間であることを思い起こさせてくれる。

従って「官僚資本家」や「売国奴」というレッテルを取り除いて盛を一人の人間に返せば、その見聞を記録した「日記」の分析を通していえることは、盛が時代の要請に応じて行動する人であり、現実から目を反らすことなく、その中でベストを尽くし、本国の進歩、富強を切実に願っていた人間だということである。

盛宣懷は伝統文化の中で生まれ育ちながらも、近代文明の奔流に身を置きつつ、実業によって出世することに成功した人物である。盛は伝統文化のみに固

執せず、また全面的な近代文明の導入もせず、外来の先進的成果を受容し、同時に、本国の根本的社会秩序を崩さない範囲内で本国を富強にしようとした。

中国の近代化問題が検討される際、伝統秩序を支える「三綱五倫」の倫理を核心としながら、西洋近代の機器、技術、学術、制度等を導入する「中体西用」思想にしろ、或いは明末以来すでに現れ、「中体西用」の源流とされる「経世致用」思想にしろ、その功罪は今日に至っても尚議論し続けられている。盛宣懷はその思想が現れた時代に生きた典型的な人物であったことはいうまでもない。従って階級性の過度の強調を措くにしても、「中体西用」思想の功罪に対する評価によって盛宣懷に対する毀誉褒貶は自然と異なってくるが、本稿では、盛宣懷は李澤厚による「実用理性」論を体現した典型人物であると結論付けた。²³

注

1. 例えば「洋務派集団は主として大官僚と大買弁の結合という特徴を有し、……買弁化した洋務派大官僚の典型が盛宣懷であり、李（鴻章）や盛が官僚資本主義を発展させて大ブルジョアジーになるとそれら上層民族ブルジョアジーとも対立するようになった。」（楊天溢「清末洋務運動期の企業者活動——官督商弁制度を中心に」『経営史学』 1(3) 1967）と指摘されるように、官僚資本家の典型とされており、「中国の官僚資本工業は外資工業の従属者である。……清朝の官弁工業から国民党の官僚資本企業まで、事実上すべてが、濃厚な買弁性、軍事封建性、腐朽性を有している。」（『中国現代工業史』 祝慈寿著 重慶出版社 1990 P12による。日本語訳は筆者による。）とその属性について論断され、歴史的役割についても一切無視され、抹殺されようとしていた。
2. これまで空白状態から賛否両論の様相へと発展した盛宣懷研究に時間差、地域差が見られており、研究史自体が盛宣懷という人物研究の複雑さを物語っている。〔日本で発表された彭曦による論文（1998、2000）は、2000年までアメリカ、中国大陸、台湾で世に問われた先行研究を統括してまとめることに貢献した。〕

一方、盛個人の上奏稿、電稿、函稿、文稿は推定二千五百万字もあり、李鴻章の個人著作総字数の約二千万字をも上回っている。今までそれらの資料は国内外に散在しており、一部は極めて入手困難とされている。しかし近年上海図書館に代表されるように遺稿整理が進んでおり、加えて21世

紀中国の急激な経済発展に伴う近代化問題、即ち近代化の光と影への再検討の流れに乗って、盛研究がますます盛んになるものと推測できよう。

〔王宏による「上海図書館が収蔵する盛宣懷檔案についての概述（上海圖書館所蔵盛宣懷檔案概述）」をご参照いただきたい。〕〔史資料ハブ：地域文化研究：東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」(Journal of the Centre for Documentation & Area-transcultural Studies) (7), 2006.3〕

3. 「愚齋東遊日記」（以下、「日記」と称す）はかつて『愚齋存稿』（台湾台北文海出版社 1963）の付録として刊行されている。しかし、この「日記」は埋もれること半世紀近く、幾度か関連研究で提起されることはあっても、その研究価値が注目されて脚光を浴びることは、盛訪日後ちょうど一世紀も経った2008年に、その曾孫の自費によって日本で翻訳出版されるのを待たなければならなかった。（『中国近代化の開拓者・盛宣懷と日本』久保田文次 2008；本稿における「日記」からの引用箇所は、すべて本書による）
4. 岩崎弥太郎については、拙稿『『三菱』の創業に見る日本企業文化の形成と展開——日本精神の近代化の一例として——』（名古屋大学修士論文2006）及び『『三菱』の創業に見る日本近代企業文化の形成と展開——創始者岩崎弥太郎のモラルとそのバックボーンを手掛かりに』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻『言葉と文化』第8号 2007）をご参照いただきたい。尚、岩崎弥太郎と盛宣懷の比較研究は、現在執筆中の博士論文で詳述する。
5. 盛宣懷の原文では「岩崎男爵」と記されているだけであり、于乃明（1998）はそれが岩崎弥太郎であると推測した〔「小田切万寿之助研究——明治大正期中日関係史の一側面」（平成10年3月筑波大学博士（法学）学位論文、P293）〕しかし弥太郎は1885年に逝去しており、正確には弥太郎の長男で「三菱」三代目当主岩崎久弥（1865-1955、1893年に男爵を授けられた）である。
6. 『日本における近代国家の成立』 E.H.ノーマン 岩波書店 1993 P164
7. 彭曦による『盛宣懷実業活動研究』（東京外国語大学 博士論文 2000）では、1908年の訪日は始めてであるとされているが、夏東元の『盛宣懷年譜長編 上』（P12）を参照すると、それは明らかに間違いであることが分かる。
8. 1908年3月9日（光緒34年二月初七）、日本の「通信大臣」に当る。
9. 汪婉「佐藤三郎著 東方書店『中国人の見た明治日本—東遊日記の研究』」

〔『中国研究月報』第58卷No.11 (2004)〕や呂順長『湖南提学使吳慶坻の見た明治日本』(<http://www.zdrbs.com/japanese/paper/>)を参照。

10. 例えば、政界では、明治政府の元老である大隈重信、松方正義、伊藤博文や、当時の内閣総理大臣桂太郎を筆頭に、小村寿太郎（外務大臣）、後藤新平（通信大臣）等、財界では三井八郎右衛門（三井社主）、岩崎久弥（「三菱」社主）、大倉喜八郎（大倉組社長）、近藤廉平（日本郵船社長）、小田切万寿之助（横浜正金銀行取締役）等、加えて漢学者の岡千仞等60人を下らない豪華な顔ぶれであった。
11. 桃源郷の初出は六朝時代の東晋末から南朝宋にかけて活躍した詩人・陶淵明（365-427）の著した詩『桃花源記 ならびに序』である。
12. 中国で当時使われていたカレンダー（太陰暦）では八月十五日、以下の日付後の括弧はすべて太陰暦表記を示す。
13. 韓愈（768-824）、中国・中唐を代表する文人である。
14. 明時代の方岳による詩である。
15. 唐代王勃（650-676、初唐詩人）による詩である。
16. 「対聯」とは、対句を書いた掛け物であり、中国では特に清に至り、「対聯」をうまく作れるか否かは、才能の有無の判断基準とされるようになっており、「対聯」が上手いという事が知識人としてのステータスの証とされるようになっていた。
17. 夏東元『盛宣懷伝』 上海交通大学出版社 2007 P272-275
18. 筆談の詳細について、野元竜太「盛宣懷と岡千仞の筆談について」（『人間文化』通号14 2000）をご参照いただきたい。
19. 「請推広中央銀行先齊幣制摺」（1909）（夏東元『盛宣懷年譜長編 下』上海交通大学出版社 2004 P895-896）
20. 原文は、「盛宣懷在經濟活動上是順應歷史發展趨勢的、在政治上却是違反時代要求的」、日本語は拙訳による。（夏東元『盛宣懷伝』上海交通大学出版社 2007 P6）
21. これは来訪した同仁会評議員、医薬学校の理事田代亮人による名誉賛助会員になってほしいとの請求に、「我が清国の医術向上を重視しているとのことなので、私は喜んで引き受けた」という事からも伺えるだろう。
22. 『盛宣懷与上海交通大学』（陳先元、田磊編著 山西教育出版社 1996）
23. 李澤厚が主張した「実用理性」とは、先秦の儒、道、墨諸家にすでに見られるもので、現実の社会生活を重んじ、純粹抽象の思弁をせず、実用、實際、実行を強調し、問題を解く経験論的思惟を満足させようとする人生世事に対する楽観、進取、清醒、冷静な態度、と定義される。（手代木 有児、

「中体西用論をみる視点——薛化元著『晚清「中体西用」思想論（1861－1900）』、『集刊東洋學』、No.63、1990）

〈参考文献〉

（研究傾向を明確にするため、文献は年代順に示す）

日本語文献：

- E.H.ノーマン 『日本における近代国家の成立』 岩波書店 1993
彭曦 『盛宣懷実業活動研究』 東京外国語大学 博士論文 2000
藤田雄二 『アジアにおける文明の対抗：攘夷論と守旧論に関する日本、朝鮮、
中国の比較研究』 御茶の水書房 2001
久保田文次（監訳） 『中国近代化の開拓者・盛宣懷と日本』 中央公論事業出版
2008

中国語文献：

- 盛宣懷 『愚齋存稿』 台北文海出版社 1963
Feuerwerker Albert（中国語訳名：費维恺）著 虞和平 訳 『中国早期工業化：
盛宣懷（1844－1916）和官督商弁企業』（*China's Early Industrialization
: Sheng Hsuan-huai (1844-1916) and Mandarin Enterprize*）（Harvard
University Press, 1958） 中国社会科学出版社 1990
祝慈寿 『中国現代工業史』 重慶出版社 1990
陳先元、田磊 『盛宣懷与上海交通大学』 山西教育出版社 1996
夏東元 『盛宣懷年譜長編』 上海交通大学出版社 2004
夏東元 『盛宣懷伝』 上海交通大学出版社 2007